

基盤研究が本格的にスタート！

教養研究センター所長 羽田 功



現在、さまざまな大学において「教養教育」の見直し作業が急ピッチで進められています。古くは大学設置基準の大綱化に始まり、国立大学の大学院重点化や独立行政法人化あるいは18歳人口の減少による大学全入化時代の到来予測などが背景となっており、大学教育全体の抜本的な改革が求められているのだと考えられます。

とすれば、大学が社会的存在である以上、2008年に創立150年を迎える慶應義塾大学としても現行の教育システムを再考し、必要な改革を進める必要があります。特に2004年度に開設される法科大学院などの新たな大学院構想あるいは2005年度に予定されているいくつかの学部におけるカリキュラム改革などを見据えて、学部学生に対する広い意味での教養教育あるいは学部の壁に捉われない学士課程教育の再構築は避けて通ることのできない課題であり、また、それこそが全塾的な組織としての教養研究センターが取り組むべき課題だと思います。

そこで、教養センターの規約（第9条1）に定められた基盤研究として、センターはこの課題を取り上げて本格的な調査・研究活動を開始しました。基盤研究である以上、今後この活動は継続的に展

開されていくこととなりますが、昨年11月に安西塾長のもとに組織された「教育研究未来会議」での議論も視野に置きながら、当面は次の二点を研究目的として活動を進めたいと考えています。

全塾的な教養教育・学士課程教育のあり方について理念・目的などの議論を行い、これを基礎として、慶應義塾が抱える豊富な人材を活用した一貫的で体系的な教養教育カリキュラムの実現可能なモデル構築を目指す。

ここで想定されたカリキュラム・モデルを実施に移す場合に必要とされる制度・システムについての検討を行う。

基盤研究の研究会は22名のセンター所員が中心となって構成されていますが、研究会における議論内容や作業の進捗状況についてはできる限り広く広報していくつもりです。

また、研究会メンバー以外の方々にも今後ご協力をお願いすることもあるかと思っておりますので、よろしくご依頼申し上げます。

CONTENTS

基盤研究が本格的にスタート！ 羽田 功	1
共同研究クローズアップ	2
活動報告	4
インフォメーション	7
事務局だより	8

文化としてのウォーキング

代表者：近藤明彦（体研）

文部科学省学術フロンティア、超表象デジタル研究センタープロジェクト、融合研究：「文化としてのウォーキング」は公開講座「ウォーキングの理論とその文化的背景」を10月25日（土）に開催しました。この公開講座は一昨年、昨年に引き続き今回が3回目になります。

午前中は正しいウォーキングの方法の講義を行った後、日吉近郊を約2時間にわたって散策。午後は来住舎シンポジウムスペースへ移動し、4名の講師陣による二部構成の講演会を行いました。

第一部はドイツ、ライプツィヒ大学のドロシー・アルファーマン教授による「有酸素運動と身体的自己概念の関係」が経済学部教授中山純氏の通訳を交えて約1時間にわたって行われました。持久的な運動（有酸素運動）を行った場合、筋力トレーニングなどの他の運動形態に比べ身体的自己概念が向上するという結果が説明されました。

第二部は東京成徳大学教授市村操一氏による“ドイツ散歩文化の形成”、法学部教授横山千晶氏による“アメリカ 東から西へ～脱体制としての「放浪」～”、理工学部教授石井達朗氏による“ダンスと歩行”の3つの演題で講演が行われま

した。ウォーキングというと、健康指向のエクササイズ・ウォーキングのみが注目されている今日ですが、「文化としてのウォーキング」プロジェクトは歩くことに関するさまざまな文化的背景について多面的な観点から捉え、歩くことの意味を探ろうとするプロジェクトであり、今回も多彩な内容の講演となりました。

塾内からは学生・教員、そして塾外からは港北区内在住の人を中心に約30名の参加者あり公開講座は盛況裏に終了しました。



インターキャンパスの創出による多文化共生の可能性

代表者：熊倉敬聡（理工）

このプロジェクトは、現在の日本における大学の知（特に人文系）の自閉的状況を打開するために、大学内の教育・研究と大学外での実践・体験をダイナミックに相互作用させる「インターキャンパス」の創出を目指します。同時に、そのインターキャンパスの活動を通じて、多文化共生のための様々なプログラムを開発・展開していきます。

こうした展望のもと、2002年度は、東京、大阪、京都、神戸、ソウル、北京、上海等で、興味深い活動を行っているオルタナティブ・スペース、教育研究機関、NPOなどを現地調査しました。それと並行して、私が文学部で開講している「美学特殊C」という授業で、ささやかながらも「インターキャンパス」を目指したさまざまな実験を行いました。移築される前の萬来舎・ログチルームを文字通り「萬来」の空間に変容させ、新たな交歓＝交換の場を創出した「萬来喫茶イサム」。下町京島の空き家に学生たちが2カ月間住み込み、地域住民との交流を通して「オルタナティブ」とは何かを体験・再考した「京島編集室」。

このように多様な調査・実験を受け、2003年度は、プロジェクトをさらにふたつの方向で展開させています。大学を

卒業しても既存の職業・労働スタイルに魅力を感じず「フリーター」化しつつある若者たちと、そうした若者たちを必要としている非営利の組織・ネットワークをマッチングさせ、新たな職業・職場の創出をアレンジする独自のウェブシステムの開発。そのウェブシステムを補完しつつ、「インターキャンパス」的学び・ライフスタイルを実験・実践するリアル・スペースの構想。

最終年度＝2004年度は、このふたつの計画を絶えず相互作用させながら、試験的運用を試みていきたいと思っています。はたして、そこから真に新しい大学の姿を垣間見ることが出来るでしょうか。



高次生命現象の理解のための 細胞行動データベースの作成

代表者：金子洋之（文）

高次生命現象の理解を目的に、DNAやタンパク質等の分子解析的な視点からでなく、生きて行動する基本単位として、より統合的に細胞を捉え、『どういった細胞（主語）が、どのような状況下で（入力）何を行う（出力）』というフォーマットにより、あらゆる細胞行動を網羅できるデータベースを開発しています。このデータベースの特徴は、細胞行動が画像を含んだ電子化ファイル辞典として記載されていること、細胞行動オントロジーの構築により、「傷を負うと、その周囲の細胞は、マクロファージに助けを求めるといったような科学では許されない傾向にある擬人的な表現でも、自在に検索できる機能を持っていることです。本データベースが一応の完成をみたあかつきには、本塾の学生や教官の方が、新たな情報源として学習や研究に利用できるだけでなく、細胞行動と人間行動、さらに発展して人間社会をも対比できるものになればと考えています。なぜなら、本データベースの作製は、理系と文系の学問的融合をも目指しているのだから…。

さて、細胞行動データベースの作成プロジェクトは、「教育学術情報データベースなどの開発事業」と名づけられた研究費補助を受けています。通常、研究費や開発費を補助していただくときには、完成までのスケジュールを明確にし、いつまでにどれだけの作品をつくるかということを公約しなければなりません。私たちのプロジェクトの場合、4年間で、約3000件の細胞行動を網羅することを到達目標として掲げています。最初の1年間は遅々として進みませんでした。「データベースの基本システムをどのようにデザインするか?」、「本データベースに登録すべき細胞行動の枠組みをどう設定するか?」、「データ収集を依頼する人をどうやって探すか?」、「収集データの信頼性をどうやってチェックするか?」等の種々の問題が沸き起こり、ひとつひとつを解決するために、塾内のみならず、あちこちを駆け回りました。産みの苦しみであったと言っていいいでしょう。現在、ようやく軌道に乗りはじめ、データも徐々に蓄積されてきました。そして、文系の学生に開講している総合教育セミナーの教材として、十分に役立つことを確認できました。2年後の締め切りには、質の高いデータベースを前においてニコニコしていたいものです。

近代日本の衛生統計と疾病地理学

代表者：鈴木晃仁（経）

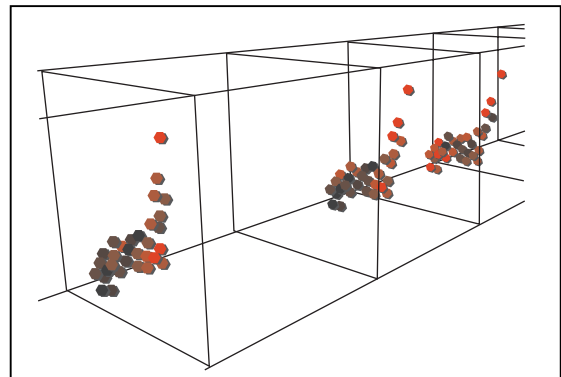
疾病の歴史を研究することにはふたつの側面があります。まず、ある時代の社会においてどのような疾病が多かったかを知ることで、その社会の特徴を知ることができます。これが、歴史研究における「リヴィーラー」としての疾病の意味です。第二に、疾病やそれに対する反応は、社会の構造をつくりかえてきました。このような、疾病が新しい社会構造をつくる契機となった事情を、疾病の「イニシエーター」としての側面と呼ぶことができます。こういった疾病のふたつの側面を研究し、社会が疾病構造に及ぼした影響と、疾病が社会構造に及ぼした影響のふたつの方向を確定して、疾病の歴史を歴史学の中に定位することを、このプロジェクトは目指しています。

明治以降の日本には、以上のような視点で歴史研究を行うのに好適な、しかも比較的使われていない膨大な史料が存在します。『衛生局年報』を筆頭に、『府県統計書』『病勢調査』『警視庁統計』など、全国、都道府県、都市など、さまざまな水準で、死亡と罹患の双方についての疾病統計がつくられてきました。それらの統計を組織的にデータ処理して、明治以降、特に衛生統計が充実した1900年近辺から、およそ半世紀にわたる日本の疾病の姿とその構造転換の詳細を明らかにする仕事を進めています。これらのデー

タを空間的に表現し、シナリオを描くときに、現在義塾で開発している「歴象オーサリング・ツール FCRONOS」が力を発揮しています。

プロジェクトのHP

<http://www.fcronos.gsec.keio.ac.jp/home.html>



手前から順に、1906 10、1936 40、1956 60年の日本における各府県のジフテリア患者死亡率を表したFCRONOS画像。赤はその年度において相対的に高い数値、黒は低い数値であることを示す。1906 10年においては大都市と日本の北部が赤くなっていたが、1956 60年になると、日本の南北の周縁が赤くなっているのが読み取れる。

スタディ・スキルズ (Study Skills) 実験授業

現代人には好むと好まざるに関わらず膨大な量の情報処理が求められています。あふれる情報の中から必要なものを選び出し、それを整理し、まとめ上げ、他者に対して発信する。確実な情報、信憑性が疑われる情報。瞬間的な重要性を持つ情報、永続的な価値を持つ情報。また、仮に信頼できて価値が高くとも、自分にとって必要な情報とそうでない情報。これらを効率的かつ適切に取捨選択するにはどうしたらよいか。そこで得た知識(情報)をどのようにまとめて活用・発信していくことが可能か。作業中に犯しやすいミスは何か。単に氾濫する情報を眺め、量に圧倒され、闇雲に検索を繰り返していても得られるものは少ないのが現実です。上手な検索・まとめ・発信をするためには、少なくとも一定の技術が必要となります。スタディ・スキルズはこうした問題意識のもと、各人の検索・情報処理・プレゼンテーション技能の向上を目指し、その学習成果を今後の論文作成や個人研究に役立てることを目的とした実験授業です。開講は火曜日と水曜日、内容は概ね以下の通りです。

【火曜クラス18:15 19:45】では同5限の極東証券寄附公開講座『生命の魅惑と恐怖』を聴講し、その内容を前提に

議論および作業を進めています。扱う内容はノートのとり方から本の探し方、ネット検索の方法から参考文献の挙げ方まで多岐にわたります。さらに、メディアセンターの協力を得て、検索ノウハウに関するミニレクチャーやNet Commons上の議論スペースなどを提供していただきました。現在、グループ単位での検索およびプレゼンテーションが終了した段階ですが、今後はこれまでに学んだスキルを応用して個人テーマを選定し、それを各人が独自に調査・検索して、最終的にレポートとして提出する予定です。今回、この授業への参加者は22名。

【水曜クラス16:30 18:00】には同3限の『身体・感覚文化論』の履修者から13名が参加。的確なノートの取り方からはじまり、書誌情報検索、情報の信憑性の吟味等について少人数グループでのディスカッションを交えながら授業が進んでいます。11月まではこれまでに聞いた講義内容から各グループが発見・設定したテーマについて情報をまとめ、発表を行うといった一連の過程が行われてきました。12月からはグループ内でのディスカッションを交えながらも、各人が特に興味をもった問い(テーマ)について各自が個人で作業を行い、最終的にプレゼンテーション・レポート提出をする予定です。

(鈴村直樹)

第4回シンポジウム 「身体知を核とした教養教育の将来」

慶應義塾大学教養研究センター第4回シンポジウム「身体知を核とした教養教育の将来」は2003年11月26日(水)4時30分より7時30分、慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎シンポジウムスペースで30名ほどの聴衆を迎えて開催されました。小菅隼人(本塾大学理工学部)の司会によって、イントロダクションの後、音楽教育の立場から石井明氏(本塾大学経済学部)、体育教育の立場から村山光義氏(本塾大学体育研究所)、国語教育の立場から野津将史氏(本塾高等学校)、読書指導の立場から鈴木淑博氏(本塾普通部)、総合的な立場から熊倉敬聡(本塾大学理工学部)の5名による報告。さらに、休憩を挟んで、楠原偕子氏(日本橋学館大学教授、本塾大学名誉教授)の代表質問の後、フロアの聴衆を交えて、質疑応答が行われました。

当日は、あらかじめ、パネリストに投げかけられてあった、「身体知をどのように定義するか?」「教養教育にとって身体知は必要か?」という2点の共通質問を中心に議論が展開されました。まず、報告者は各15分程度、2点の共通質問への回答を交えて、自らの活動の報告とその考え方を示しました。それぞれは、具体的実践の実例としても非常に興味深いものでした。また、身体知教育を芸術学

の立場から実践している楠原氏の代表質問的を射たものであり、ゆえに、活発な質疑応答を誘発するものとなりました。しかし、テーマの性格上、やっとな問題点が浮かび上がった段階で、時間切れとなったことは、この問題についてさらに議論を深めてゆく必要があることを痛感させます。たとえば、熊倉氏、石井氏、村山氏の立場の違いからくる意見の相違を炙り出すこと、あるいは、とかくありがちな、「面白いことばかりでなく、もっと基礎教育を…」という意見に対する反論を、野津氏、鈴木氏などからも引き出す余裕がなかったことは残念です。また、教養教育における教師と学生の「距離」の問題や、身体知教育の「評価」の問題はFDとの関連においても興味ある論点となりえたでしょう。そのためか、シンポジウムの後、ファカルティ・ラウンジで行われた懇親会でも、いつもにましてこれらのテーマをめぐる議論をする光景が多く見られました。

ともあれ、今回、大学のみならず一貫校からもパネリストや多くの聴衆を迎えてシンポジウムを開催出来た点は、教養研究センターの活動に新たな展開をもたらしたものと自負しています。今後、継続的に身体知をめぐる教養教育のあり方を議論してゆくことが望まれます。

(小菅隼人)

極東証券寄附公開講座

2003年度極東証券寄附公開講座は、生命に関する諸科学が社会において中心的な役割を担いつつある時代の潮流に注目し、関連諸領域の相互交流とそれに基づく総合的視点構築が今後より一層重要性を増すであろうという認識に立って、「生命の魅惑と恐怖」というテーマの下で、医学、文学、歴史学、社会学、生命倫理学、法学、哲学などさまざまな分野から研究者を招いて、多彩な視点から「生命」の問題を考えようと試みました。10月7日から始まった10回の講義には、130名（学生67名、一般63名）の受講登録があり、脳死問題からナチスの優生学まで、生命主義から生権力の問題まで、生命関連問題の諸相に否応なく付きまとう光と影、魅惑と恐怖について熱のこもった刺激的な講演が展開され、その後には多世代間の熱気をはらんだ質疑応答が続きました。生命倫理の問題に科学的知識のみならず人文科学的思考が必須なこと、芸術上の生命主義がファシズム的・優生学的流れに繋がりがりうることなどが示されて、領域横断的思考の重要性が、各講義の相互関連から自ずと浮かび上がってきたのではないかと思います。また、内容的には、例年より一層アカデミックな思考を重視したものとなり、当講座の授業化（教養研究セ

ンター設置科目）に向けての第一歩が記されました。

また、当講座の「スペシャルエディション」として、「生命の魅惑と恐怖」という問題意識をわれわれと共有しつつ、『エラン・ヴィタール Eveの躁鬱』、『春の祭典』などの衝撃的な舞台により国際的に活躍するダンスグループH・アール・カオスのレクチャー&パフォーマンスが10月16日の17時から来往舎1階イベントテラスで実現し（写真参照）演出家大島早紀子氏のトークと白河直子氏をはじめとするダンサーたちの踊りで満員の聴衆を魅了しました。

（武藤浩史）



HAPPの秋

2003年度秋学期において慶應義塾大学教養センター日吉行事企画委員会（以下HAPP）は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を中心として活動を行っています。

採択された5つの公募企画（学生企画が3つ、教員企画と職員企画がそれぞれ1つ）のうち、この原稿の執筆時にはすでに3つの催し物が遂行され、いずれも成功を収めています。まず、11月13・14日に最初の企画が来往舎イベントテラスで行われました。『Weather map』とタイトルされた学生企画で、天気をテーマとした、音楽と映像の複合ライブでした。2番目の企画は、12月1日から6日まで来往舎ギャラリースペースで開かれた、『筆遊び彩書』でした。これは、職員が企画した、文字でイメージを書いた作品の展示と“彩書”の講習会でした。講習には、予定を大きく上回る数の参加希望者がありました。また、12月5・6日には、『色即是空』と名づけられた、マジック、ジャグリング等が含まれた総合エンターテイメントショーがイベントテラスで開かれました。この企画は、大道芸を中心とした催し物ということもあり、多様な人々に感心を抱いていただきました。結果、小さなお子さんを含むとても多くの地域の方々に来場していただき、日吉キャンパスと地域住民との交流が強く確認されたイベントとなりました。

また、慶應義塾以外の学生も多数出演者として参加し、今後のHAPPの活動が、慶應という枠を越えて広く展開されるであろうことが示唆されました。

今後催される企画はふたつあります。12月13日には、教員企画である英語劇、『まじめが肝心』と『サイティングス』が、前者がキャラリースペースで後者がイベントテラスで公演される予定です。これらは、演劇を通じて英語を学ぶことを目的とした授業を担当している教員による企画で、授業に参加している学生が演じることになっています。今年度最後のイベントは、『Aria イマージュと現実、写真/映像を巡るシンポジウム』と題された、12月19日と20日に行われる、自主制作映画の上映会と吉増剛造氏を囲んで開かれるシンポジウムです（学生企画）著名人を招いてのシンポジウムでは、有意義なディスカッションが期待されます。

これらの公募企画にはHAPPより補助金が支給され、HAPPの監督下で企画が実行されます。各企画の実行者は、綿密な企画・計画書を作成し、企画終了時においては、来場していただいた方々の声を反映した報告書をつくるのが義務づけられています。これら企画書と報告書は、HAPPのホームページ（<http://www.hc.cc.keio.ac.jp/happ/>）において公表を予定しています。

（石井 明）

慶應義塾大学港北区民講座

2003年9月20日に日吉キャンパス第二校舎において、本講座を開催しました。テーマは「DNAとナイロンの実験をしてみよう!」で、小学生から大人まで約30名が参加しました。本講座は港北区から委託を受けて教養研究センターが実施するものですが、座学ではなく実践型のテーマを目指しています。今回は、親子でも参加して楽しめるような実験を企画しました。午前中は生物学教室の実習室で、サケの精巢からDNA(デオキシリボ核酸)を遠心分離機を使って抽出する実験でした。昼休みの後、ビデオを30分上映しました。ワトソンとクリックがDNAの二重らせん構造モデルを発表したのは1953年で、ちょうど50年前であることなどが紹介されました。午後は化学教室で、ナイロンの合成実験を行いました。ピーカの中で2種類の透明な液体を接触させると、その界面に白い膜ができ、それを外に引き上げると糸状になります。それがナイロンです。子どもたちは「これはマジックだ」といって目を輝かせていました。実験を通して、自然科学への興味が少しでも深まるとすれば成功です。なお、実験の実施にあたっては、安全面に十分注意を払いました。

(大場 茂)

教養研究センター、TBSに登場

昨年10月28日、教養研究センターがTBSの衛星デジタル放送BS-iによる取材を受けました。この取材内容は、筑紫哲也氏によるシリーズ番組『現代日本学原論』のうち「日本人の知力は低下したか」をテーマとした11月21日放送回の中で、問題提起のための資料映像として使用されました。

番組はさまざまな角度から現代日本における「知力」のあり方を取り上げ、資料映像を素材としつつ、筑紫氏、森毅氏、天野祐吉氏が自由に語り合う対談形式で構成されていました。教養研究センターについては、福澤諭吉と適塾・慶應義塾・教養研究センター(来往舎)の紹介、羽田による「教養の系譜と現状」の説明と「知」の組み直しの必要性の指摘、極東証券寄附公開講座「生命の魅惑と恐怖」の講師・識名章喜氏(商学部教授)へのインタビューなどで構成された9分ほどの映像でしたが、番組では従来型の「教養」を超えた「知」の組み直しの問題をめぐり、上記三氏による活発な議論が展開されました。

(羽田 功)

シリーズ 開かれゆくキャンパス1

「国際学生懇談会in Hiyoshi 海外留学から学んだこと」

12月12日(金)18時からのシンポジウムは、雨模様の中、日吉の学生はもとより、矢上や三田やSFCの学生も参加し、和やかな雰囲気で行われました(参加者は39名。うち10名が教員)。マリ・ガボリオ経済学部助教授の開会の挨拶ではじまり、長田佳子(経3)の司会の下で、国立シンガポール大学に留学した吉野慶一(経4)、フランスのESSEC(経営商科大学院大学)に留学した前田陽一(経4)、韓国から経済学を勉強しに来たベ・ヘリ(経1)、ドイツから日本語と文化を学びに来たマリア・ズザンネ・フメル(日本語コース)、中国から日本語と法学を勉強しに来た姜麗娜(法1)の皆さんが、順々に留学の目的や言語や生活習慣での失敗例や成功例を話し、その後それぞれの留学地と自国の大学教育を比較検討して、これからの大学教育に何が必要か、提言をしてもらいました。そして、フロアからの質問にも率直に答えてもらい、2時間のシンポジウムは終わりました。交流・連携セクションの小淵昭夫の閉会の辞のあと、飲物とお茶菓子で懇親会が行われ、9時まで語り合いました。

(小淵昭夫)

2003年度第1回運営委員会報告

2003年9月27日(土)の13時から、2003年度第1回の運営委員会が来往舎大会議室において開催されました。

黒田昌裕常任理事のご挨拶に続いて、羽田所長から、「所長は、羽田所長の重任となり、任期が2003年10月1日から1年であること」「7月に2002年度活動報告書を刊行し、センター設立までの準備段階を含めて記録したこと」「2003年度前期の活動内容」が詳しく報告されました。

引き続き審議事項に入り、まず、副所長として、法学部教授下村裕君(新任)、理工学部助教授熊倉敬聡君(新任)、体育研究所教授近藤明彦君(重任)の3名が選任されました(任期はいずれも1年間)。これとともに、2003年4月1日~2005年3月31日までの所員と兼任研究員が選任されました。

最後に、「学生研究員に関する内規(案)」が審議されました。「日吉キャンパスが主な研究拠点である教養研究センターにとっては、学生も重要な研究協力者であろう」という意見が出され、提案通りに承認されました。

(宮木さえみ)

科学研究費補助金取得勉強会

2003年10月2日(木) 18:15 19:30、日吉キャンパス来往舎において科学研究費補助金取得勉強会が開催されました。講師として武藤浩史(法学部教授)、木島伸彦(商学部助教授)、村上利恵子(日吉研究支援センター)を迎え、実際の申請書の書き方について、お話を伺いました。武藤さん(基盤研究:文学:研究課題「科学のおよび文化的感覚研究を援用した英文学・文化感覚史」)の題名にも窺われるように、従来の英文学の狭い領域の研究ではなく、脱領域的、先端科学との関連性のある、教養教育へ貢献す

る、独創的な研究テーマです)は、申請書の各項目別にご説明されました。木島さん(若手研究:パーソナリティ心理学:研究課題の内容は、政策とリンクした、現代の社会問題と関連のある最新の研究です)は、申請書を読みやすくする具体的な工夫をご提示いただきました。おふたりの研究は「従来の特定分野の狭い専門領域の研究ではなく、多様な分野と連携し、現代の先鋭的な問題に関わっている」といえるでしょう。村上さんからは、申請の事務的な注意事項をご説明いただきました。26名の参加者があり、活発な質疑応答が行われ、盛況のうちに幕を閉じました。

(西川正二)

Topics

トピックス

SFCのCOL「問題発見・解決型教育の先導実践」

大学・短大の教育面での優れた取り組みに予算を重点配分する文部科学省の「特色ある大学教育支援プログラム:COL(Center of Learning)」。5つの募集テーマ(総合的取り組み、教育課程の工夫、教育方法の工夫、学習・課外活動への支援、地域・社会との連携)が設定され、2003年9月、初年度分として80校が発表されました。ご存じのように、本塾湘南藤沢キャンパス(SFC)も、総合的取り組み「問題発見・解決型教育の先導実践」をテーマとして選定されています。

SFCは1990年の開学以来、問題発見・解決型教育を実践し、AO入試や外国語教育、情報リテラシー教育など日本の大学改革を先導する役割を果たしてきました。こうしたさまざまな教育実践の成果が評価されたこと、最先端の情報ネットワーク環境の下で問題発見・解決型教育のさらなる徹底化・高度化・多様化を目指していくこと(「SFC version 2.0」と呼ばれる新たなカリキュラムの開発)を期待されたものです。

「SFC version 2.0」では、研究プロジェクトを中心に据え学年制を廃止。SFC教員の研究領域を15のクラスター(図参照)としてまとめ、文・理の協調、教育と研究の融合、教養と専門の融合など優れた特徴をもっています。今後は2008年をめどに、ユビキタス環境の整備、ベンチャー育成支援、デジタルアジア連携、地域社会連携などのプログラムを推進し、慶應義塾が

目指す「独立自尊」と社会を先導する人材の育成に向けて、さらなる前進を図っていくとのこと。

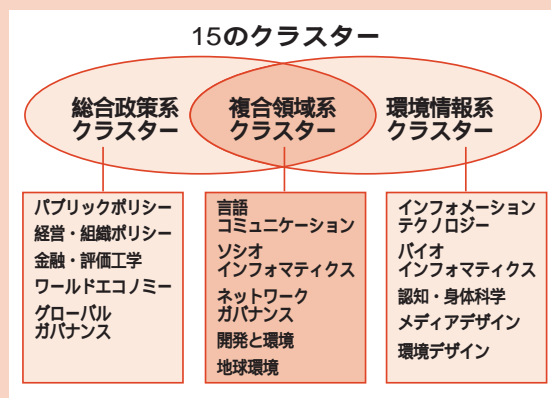
「COL」の審査は「特色」のほかに「実践・成果」や他大学・短大の参考になることなどを重視して進められており、

教養教育や語学、情報教育、専門教育などのカリキュラムを充実させて成果をあげている、

学生に対して厳格な成績評価を実施している、

学生の授業に対する満足度を高めている、

など幅広い分野が設けられています。今後、日吉キャンパスでも「特色ある大学教育」の「実績」をつくるための活動を実践していく必要性を強く感じます。



「教養研究センター・ブックレット」の審査結果

教養研究センター所員・研究員の先端的な研究活動の一端を学生や一般読者にわかりやすく紹介する「教養研究センター・ブックレット」。第1回目の今年度の応募原稿は4点でした。これを受けて、センターでは応募作品の内容に応じた専門分野の研究者にもお願いして審査委員会を組織し、審査を行いました。

ちなみに審査は、それぞれの研究分野において従来にない先端的な部分を紹介するものであること、学生や一般読者に理解できる内容・形式を持っていること、の二点を基本として行われました。その結果、今年度は文学部の桜井準也氏の「モノが語る日本の近代生活 近現代考古学のすすめ」が採択されました。近現代考古学という新しい分野の紹介や具体的な調査・研究の方法や実践例などがブックレットの趣旨にふさわしいと判断されたためです。ブックレットは3月末に刊行予定ですのでご期待ください。なお、来年度も募集を行いますので、より多くの方々のご応募をお待ちしております。

(羽田 功)

教養研究センター連続セミナー「FDを考える」開始

教養研究センターが主催する連続セミナー「FDを考える」がスタートしました。10月から月1回のペースでこれまで3回のセミナーが開催されており、これまでに第1回「FDの事例報告 アメリカの授業運営」：松岡和美（経済学部）・コメンテーター：石井康史（経済学部）第2回「学生による授業評価とFD活動 シラバスと授業評価・SFCにおける12年の推移」井下理（総合政策学部）第3回「日本の大学の欠陥を補完する制度・GPA/アドバイザー制」諸星裕（桜美林大学）が行われました。各セミナーは60分程度の講演の後、参加者とのディスカッションを30分程度と予定していましたが、講師の熱心なお話や活発な議論のため予定時間をオーバーすることもしばしば。

これまで行われたセミナーへの参加者は教員・職員・学生・一般にまでにおよぶものの、参加者数は毎回20~30名程度とまだまだ連続セミナー「FDを考える」の認知度は低いようです。今後より多くの参加者を期待いたします。また、実施されたセミナーの概要は教養研究センターが発行する「慶應義塾大学教養研究センターレポート」にまとめられ配付されます。セミナーでの資料等が必要な方は教養研究センターにお問い合わせください。

(近藤明彦)

教養研究センター設置授業を開講

ご承知のように、教養研究センターでは今年度秋学期に実験授業を実施しました。それが学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」プロジェクトの一環として設置された「スタディ・スキルズ」(2コマ)で、「知」の体系や広がりを知り、大学における自分の位置を確かめる手がかりをつかみ、同時にアカデミックな生活に必要なスキルを身につけることを目的とした、複数教員と学生による双方向型の授業です。この授業は文学部設置「身体・感覚/文化」ならびに極東証券寄附公開講座「生命の魅惑と恐怖」とセットで行われ、たえずこれらの講義・講座のトピックを素材としながら、15名から20名の少人数クラスで実施されました。参加した学生はひじょうに熱心に課題に取り組み、最後には質の高いプレゼンテーションが行えるまでになりました。

こうした成果を踏まえ、センターは2004年度に「スタディ・スキルズ」(春学期2コマ)、「同」(秋学期2コマ)「生命の教養学」を極東証券寄附講座として授業化することとしました(法学部設置「身体・感覚/文化」もセット履修が可能)。大学評議会での承認を経て、文学部、法学部、商学部、看護医療学部では卒業単位としての認定も決まっています。センターとしては今年度以上の成果を目指して取り組んでいきますので、皆様のご理解とご協力をお願いする次第です。

(羽田 功)

事務局だより

今回のニューズレターをお読みいただければおわかりと思いますが2003年も秋からさまざまな企画が実施され、研究についてもセンターの特定研究と一般研究にかかわる先生方の報告会が開催されました。さらに基盤研究メンバーが決まり、活動を開始しています。そんなこんなで事務担当者としてはやっと1年間が終わるという実感です。来年度はセンター開所3年目に入ります。先生方の研究成果を多くの場で報告していただくために、事務としてできる限りのサポートを行いたいと思っています。

(宮坂敦子)

=お知らせ=

学術フロンティア「超表象デジタル研究センター」報告会の実施

日時：1月24日(土) 13:00~17:00
会場：大会議室(来往舎2階)
参加希望者はセンター事務局(担当 内線33012 宮坂)までご連絡ください。

Newsletter

2004.Jan. No.3

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

発行日 2004年1月15日

代表者 羽田 功

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111(代表)

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/

「教養研究センター一般研究」の募集
2004年度のセンター一般研究(共同研究)の公募を次の期間いたします。

2004年2月4日(水)~2月27日(金)
所定の申し込み用紙に記入して申し込んでください。用紙は教養研究センターコーディネート・オフィスで配布しています。また、Webサイトからもダウンロードできます。詳細は、来往者1階の教養研究センター掲示板とWebサイトをご覧ください。

教養研究センター所員の募集
センターでは専任教員の方々にもさまざまな企画や研究活動を通じて、センターの運営に参加していただいています。教養研究センターの活動に関心のある方は所員にご登録ください。詳細はコーディネート・オフィス担当まで
(担当 内線33012 宮坂)